

## 「コロナ禍」での伝道礼拝について

2021年6月15日(火)

小野寺泉

### はじめに

わたしたちの群れは今月末に伝道礼拝を計画しています。そのことが「コロナ禍」という状況を見無視した何かの無謀な試みではなく、ごく普通の営みであることを共に確認したいと思います。

## I 新型コロナ・ウィルスについて

### 1. 新型コロナの感染状況。

新型コロナ・ウィルス(以下新型コロナ)による感染症は2019年冬に中国で始まり、翌年にはアツという間に世界中に広がりパンデミック(世界的流行)となりました。そのような状況になって、2年目を迎えています。統計を見ると、2021年6月12日(土)15時現在、世界では1億7517万7311名の感染者があり、その内1億1322万4561名が回復しています。約6000万人以上の方々が闘病中ということになります。医療現場にいる方々の奮闘してくださっていることが分かります。しかしまた378万5130名の方々が亡くなっています。こうした状況は、ワクチン接種が始まっているとはいえ、新型コロナがまだまだ活発であることを示しています。

### 2. 新型コロナとは。

さて少しおさらいのようなことをお話します。新型コロナというウィルスのサイズは細菌よりも、さらに小さいものです。例えばブドウ球菌は食中毒をもたらすことで知られていますが、そのサイズは1ミリの1万分の1で1 $\mu$ m(マイクロメートル)です。しかし新型コロナはそれよりもさらに小さく、140nm(ナノメートル)です。1nm(ナノメートル)は1 $\mu$ mの1万分の1ですから、ブドウ球菌の1000分の1サイズということになり、想像できないくらい小さく、想像できないくらい小さいです。

またウィルスは細菌とちがって自己増殖ができません。他の生物の細胞に吸着して増殖します。ウィルスの感染は、そのために起こるわけです。

この極小な生物が、何故恐ろしいのかというと、これまで経験したことの無い未知のウィルスであること、極小で目に見えないこと、決定的な治療薬がないこと、また呼吸器にダメージを与えて急激に死に至らせる場合があることは分かっていますが、それ以外にどのような症状をもたらすのかよく分からないこと、また感染経路も飛沫感染と接触感染が多いというだけで、どのような感染経路を辿るのか明確ではないこと、以上のような理由によるわけです。

しかし新型コロナはタンパク質できていることが分かっています。だから普通の食器用洗剤で十分落とすことができます。また唾などの液に含まれていますからマスク着用や人のとの距離を取ることも有効な対策です。

### 3. 新型コロナの影響の特徴

以上のような極小の生物が猛威をふるい、わたしたちの日常生活を大きく変えているわけです。その中で一番の変化は、これまでのように人が集まることが出来ないということです。しかし新型コロナは農作物に感染しません。農作物はちゃんと育ち、食べ物はちゃんと供給されています。だから新型コロナは人が食べるという自然の営みにダメージを与えず、集まって何かをするという人間の文化的な営みにダメージを与えているわけです。ここにこのウィルスの特徴があります。

その意味ではキリスト教会も例外ではありません。教会は「エクレシア」といいます。「呼び集められた群れ」という意味です。ですから集まることができないというのは、教会にとっても大きな打撃に違いありません。

## II 何故「コロナ禍」で礼拝を守ることができるのか。

### 1. 創造主なる神を信じる幸い

では、このような状況において、どのように教会とその活動を考えたらよいかということですが、第一に、聖書に従って考えると、新型コロナは、わたしたちの暮らしにダメージを与えるウィルスですが、神によって創造された被造物の一つである、ということです。被造物であるとは、新型コロナがどのような脅威をもたらすにせよ、神によって造られた物として神のご支配のもとにある、ということです。

したがって新型コロナは、神のご支配の及ばない力をもっていたり、神に対抗しえる独立した力をもっていたりするものではない、ということです。ましてや新型コロナは禍をもたらす悪魔

の使いようなものではないのです。神のご支配の中にある被造物にすぎません。

それゆえにメディアが造り出した「コロナ禍」という言葉によって無暗に恐れる必要はありません。神の御支配にある被造物ですから、神は御心になつた時に新型コロナを終息させてくださいます。そこに希望をもって、わたしたちは知恵と力を尽くして「コロナ対策」をしてよいのです。そしてこのような希望は教会だけが語れるものなのです。だから「コロナ禍」でも礼拝を守ります。

## 2. 礼拝は神の恵みの業である

そこで教会についてです。教会は「エクレシア」であって「呼び集められた群れ」であるといいました。では、誰に呼び集められ、どこに集まるのかというと、神の言葉であるイエス・キリストに呼び集められ、その下に集まるのです。

これは、目に見える形では日曜日に教会に集まって礼拝をするということになります。しかし今「コロナ禍」のために集まるのが出来ません。では、主イエス・キリストはわたしたちを呼び集めるのをお止めになったのか？そうではないわけです。主イエスは、どのような時にも、わたしたちに向かって御言葉を語りつつ、御自身の下へと集めてくださるのです。ハイデルベルク信仰問答は問答 54 で教会について次のようにいっていました。

問 「聖なる公同の教会」について、あなたは何を信じていますか。

答 神の御子が、全人類の中から、御自身のために永遠の命へとえられた一つの群れを、御自分の御霊と御言葉とにより、まことの信仰の一致において、世の初めから終わりまで集め、守り、保たれるということ、そしてまた、わたしがその群れの生きた部分であり、永遠にそうあり続けるということです。

わたしたちが教会に集まるのは、目に見える仕方であるにせよ目に見えない仕方であるにせよ、常に神の言葉である主イエス・キリストが呼び集めておられるからです。その意味で礼拝は、人間の業ではなく、神の恵みのみ業なのです。「コロナ禍」以前にも「コロナ禍」においても、主イエスの周りに集まることに何の変わりもないのです。

このように主イエスがわたしたちを呼び集めるのは何故か。それは神ご自身が主イエスにおいて、わたしたちとこの世界に出会い御自身の恵みをもたらすためなのです。「あなたは、どのような状態であっても、わたしのものである」という救いをもたらすためです。その意味で礼拝は「キリスト者の義務であり、キリスト者が死守すべき生命線である」前に、たとえ天地が壊れても失われることがない神の恵みのみ業なのです。

## 3 実際に礼拝を守るための工夫について

そこで最後に礼拝の守り方です。新型コロナは人口密度によって感染量に多寡の差があります。またそれに応じて地域ごとの対策にも強弱もあるわけです。ですから一律にいうことはできません。しかし基本的な合意はできるはずで、礼拝は人間の都合で神の業ですから、「不用不急」にはあたりません。あえて言えば「有用緊急」なのです。というのは、神が主イエス・キリストにおいて、わたしたちの所へ来てくださるからです。

### (1) 自宅で礼拝を守る目安

その上で次のような配慮が求められるわけです。

- ①体調が優れない場合、
- ②ノンクリスチャンのご家族が強く心配する場合、
- ③幼い子供がある場合、

その他、やむを得ない事情がある場合は、ご自宅で礼拝を守ります。

### (2) 自宅で礼拝を守るための工夫

自宅で礼拝を守る場合の工夫は次のとおりです。

- ①説教原稿の配布すること。『家庭礼拝暦』を利用すること。
- ②説教集を利用する。これは教会の牧師が推薦するものが望ましい。
- ③教会が礼拝出席できない者たちのために、いわゆるリモートによる礼拝など準備しておき、それを利用すること。

以上のような工夫をしつつ、「コロナ禍」にあっても変わることなく、共に、主の恵みにあずかりたいものです。